

LINEにおける既読・未読とネガティブ感情発現の関連

——10～50代を対象とした大規模調査による記述的分析——

加藤 由樹

Read/Unread Status and Negative Emotional Reactivity on LINE: A Descriptive Analysis Based on a Large-Scale Survey of Adolescents to Middle-Aged Adults

Yuuki KATO

This study examines the relationship between "read/unread" status on LINE and negative emotions in everyday communication. Drawing on a large-scale survey of 2,367 users (aged 15–59), we analyzed 56,552 scenario-based responses across eight relationship types. "Negative emotional occurrence" was defined as the presence of at least one of four emotions: anxiety, anger, sadness, or guilt. Descriptive comparisons revealed nearly identical rates of negative emotion for both read (44.9%) and unread (44.8%) states, with no meaningful differences across relationship categories. Furthermore, a supplementary logistic regression—controlling for age, gender, and relational context—confirmed that read/unread status was not a significant predictor of emotional response. Instead, relationship type, particularly romantic ties, showed a stronger association with negative emotions. These findings suggest that read/unread status does not function as an isolated emotional trigger; rather, it acquires meaning through relational and contextual factors. This study provides a comprehensive overview of reactions to read-receipts and establishes a foundation for future research on digital communication.

Keywords: read-receipt cues, mobile messaging, negative emotions, interpersonal context, descriptive survey analysis

1. はじめに

スマートフォンの急速な普及とともに、メッセージアプリは、日常的なコミュニケーションの主たる手段として社会に定着した。特に日本では、LINEは家族・友人・恋人などの親しい関係から、職場での業務連絡に至るまで幅広く利用されており、世代を問わず生活に深く組み込まれている。総務省「令和6年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」によれば、LINEの利用率は若年層のみならず30代以上の成人層でも極めて高く、40代・50代でも主要なコミュニケーションツ-

ルとして常用されている（総務省, 2025）。こうした社会的背景を踏まえると、LINEにおけるメッセージの扱い方や読み方が対人関係の認知や感情に影響を及ぼすのは、特定の年代やコミュニティに限られた現象ではなく、広く現代社会に共通する課題と言える。

LINEの主要な機能のひとつである「既読表示」は、受信者がメッセージを確認したかどうかを送信者に即時的に知らせるものであり、この機能が利用者の心理に大きな影響を与えることは以前から指摘されてきた。近年では「既読スルー」「未読スルー」といった表現が一般語として浸透し、SNSやメディアにおいても頻繁に用いられている。これらの言葉が広く共有されている背景には、既読・未読の状態が単に「読んだ／読んでいない」を超えて、返信の意図や人間関係の距離感を象徴する重要なシグナル（Lynden & Rasmussen, 2017）として解釈されやすいという現状がある。また、既読後に返信がない状況が「無視」「拒絶」と捉えられることも多く、利用者の間では対人不安や緊張を引き起こす要因（Blabst & Diefenbach, 2017）となることが知られている。同様に、未読状態が長時間続く場合には「わざと読まないのではないか」「読む気がないのではないか」など、多様な推測や誤解を生む可能性がある（Agarwal et al., 2022）。

著者は2016年に大学生を対象とした自由記述調査を実施し、LINEの既読表示機能に対する評価や、既読無視・未読無視が引き起こす心理的反応を整理した（加藤, 2016）。その結果、既読表示は安心感と利便性を提供する一方、既読後の無反応は不安・苛立ち・失望などのネガティブ感情を強く喚起すること、また未読状態が続く状況においても「忙しい」「関心がない」「関係を避けている」など、多義的な解釈が生じることが明らかになった。これらの知見は、既読・未読という単純な状態が実際には高い社会的含意をもち、人々の対人解釈（interpersonal appraisal）やコミュニケーション行動に影響していることを示している。

しかしながら、既読・未読に関するこれまでの研究にはいくつかの課題が残されている（Kato et al., 2020）。第一に、既読・未読が具体的にどのようなネガティブ感情を引き起こすのか、またその程度がどれほどかという点について、数量的な分析は十分に蓄積されていない。第二に、既読・未読の心理的意味は、相手との関係性によって大きく異なると考えられるにもかかわらず、多様な対人文脈を横断的に比較した研究はほとんど存在しない。第三に、既読・未読に対する反応傾向が世代間でものように異なるのかについても十分に検討されておらず、特に中高年層を含むデータに基づいた分析は不足している。

こうした背景のもと、本研究では、15歳から59歳までの幅広い年齢層を対象とした大規模調査データを用い、既読・未読の状態がネガティブ感情の発生にどの程度関わるのかを記述的に検討する。特に本研究は、相手関係の種類（親、子、友人、恋人、片思い、配偶者、同僚・部下、上司）を横断的に扱うという点に独自性があり、既読・未読が対人文脈によってどのように異なる意味づけを持つのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では、詳細な因果推論や高度な統計モデリングを目指すのではなく、基本的なクロス集計と補助的ロジスティック回帰による基礎的整理に焦点を置く。これは、既読・未読に関する複雑な心理過程を包括的に解明することよりも、まずその全体像と基本的傾向を明確に示し、今後の研究に活用し得る「資料的・探索的知見」を提供することを主目的とするためである。

2. 方法

2.1 調査デザインと参加者

本研究では、2023年2月に国内オンライン調査会社を通じて収集された、15歳から59歳のLINE利用者2,367名の回答データを用いた。著者らはこれまで、本データセットの一部を用いて、特定の相手関係や若年層のサブサンプルに限定した分析を行ってきた（加藤ほか, 2026）。また、返信遅延と感情発生の時間的ダイナミクスに焦点を当てた分析を行っている（Kato & Kato, in preparation）。それらの研究では、分析目的に応じて対象となる相手関係や年齢層を限定していた。

これに対し、本稿は既読・未読という二つの状態に対する反応の全体像を資料的に整理することを目的とする。そのため、特定の年齢層や相手関係に限定せず、調査対象となった全参加者を母体としたうえで、各参加者が実際にLINEでやりとりしていると回答した相手について得られた回答を分析対象とした。したがって、相手ごとに非該当のケースは構造的欠損となり、最終的な分析は有効回答に基づいて行った。

2.2 測定項目

本調査では、参加者が日常的にLINEでやりとりする相手（親、子、友人、恋人、片思い、配偶者、同僚・部下、上司）との典型的な場面を想定したシナリオを提示した。シナリオは、メッセージを送受信した後、そのメッセージが「既読」なのか、あるいは「未読」のままなのかという状況を設定し、そのうえで参加者がどのような感情反応を示すかを尋ねる構成となっている。

また、調査には二つのバージョンがあり、一つは自分がメッセージを送り相手の行動を待つ「待つ立場」、もう一つは自分が相手への返信を待たせている状況を想定する「待たせる立場」であった。参加者はどちらか一方のバージョンに回答した。

感情反応については、不安・怒り・悲しみ・罪悪感の四つの感情を対象とし、それぞれについて「その感情が生じ始めるまでの時間」を1～14の時間カテゴリーから選択してもらった。これらのカテゴリーは、1 = 1分以内、2 = 5分以内、3 = 10分以内……14 = 1日以上といった具体的な経過時間を表しており、感情がまったく生じない場合には15（無感情）を選択する形式であった。したがって、この質問はもともと多段階の時間的な評価であり、感情の有無を直接問う二択式の質問ではない。

本稿では、この15段階の回答にもとづき、各感情について1～14を「感情が発現した」、15を「発現しなかった」と再整理した。さらに、四つの感情のうちいずれか一つでも発現が認められた場合を「ネガティブ感情あり（1）」、すべてが15であった場合を「なし（0）」と定義し、この感情発現の有無（emotion occurrence）を主要な従属変数として用いる。

2.3 分析の着眼点

本研究では、既読・未読とネガティブ感情の発現との関係を、できるだけ直感的に理解できる形で示すことを重視した。そのため、分析の着眼点としては、次の三つの問いを中心に据えた。

第一に、既読・未読の違いによって、感情が発現した割合にどの程度差がみられるのかという、最も基礎的な全体傾向を把握する。これは、本稿が目指す「既読・未読の全体像」の把握に直結する視点である。

第二に、この全体傾向が「誰とのやりとりか」によってどのように姿を変えるのかを明らかにするため、八種類の相手関係（親、子、友人、恋人、片思い、配偶者、同僚・部下、上司）ごとに既読・未読時の感情発現率を比較した。関係性による効果の違いは、既読・未読の心理的意味を理解する上で不可欠である。

第三に、観察された傾向が年齢や性別といった基礎的な背景要因によって説明されうるものかどうかを確認するため、補助的なロジスティック回帰分析を行った。ここでは、既読・未読を主たる説明変数としつつ、背景要因を統制したうえで関連の方向性と強さを検討した。ただし、本分析は因果推論ではなく、基礎的関連の把握を目的とする。

2.4 分析手続き

分析手続きは、2.3で示した三つの視点を具体化するかたちで進めた。まず、1～15の時間カテゴリーから「感情発現の有無（0 / 1）」を再符号化し、主要な変数（相手関係、既読・未読、役割、年齢、性別）を整備した。

次に、既読時と未読時におけるネガティブ感情発現率を集計し、既読・未読による全体的な違いを確認した。続いて、親、子、友人、恋人、片思い、配偶者、同僚・部下、上司の八種類の相手関係ご

とに、既読・未読のパターンを比較し、関係性による傾向の相違を検討した。

さらに、こうした傾向が年齢や性別といった基本属性を考慮した場合にも維持されるかを確認するため、補助的なロジスティック回帰分析を実施した。

なお、本研究の集計および統計解析にはR (version 4.5.1) を主に使用し、データ処理および基本的な可視化にはtidyverseパッケージを用いた。また、一部の図表作成や補助的な検算にはPython (pandasとmatplotlibなど) も併用し、両環境を補完的に活用した。

3. 結果

3.1 全体的傾向：既読・未読と感情発現の関係

最初に、既読・未読という二つの状態が、ネガティブ感情の発現 (emotion occurrence) にどの程度関わるのかを全体レベルで検討した。本研究で分析対象となった56,552ケースのうち、既読時の感情発現率は44.9%、未読時は44.8%であり、両者の差はごくわずかであった (表1および図1)。すなわち、メッセージが既読になっているか、未読のままであるかという状態そのものは、ネガティブ感情が生じるか否かを左右する主要因とは言い難い。

表1 既読・未読とネガティブ感情発現の関係

状 態	n	感情発現率
既読 (read)	28,276	0.449
未読 (unread)	28,276	0.448

注：nは、4種類のネガティブ感情（不安・怒り・悲しみ・罪悪感）について、いずれかの感情の「発現に関する回答」が得られた行の総数である。本データは「参加者 × 相手 × 感情」の形式で構成されているため、参加者は最大32行（8相手 × 4感情）を持ちうる。全体の分析単位は56,552行であり、既読と未読はデザイン上 等しい行数に割り当てられている。

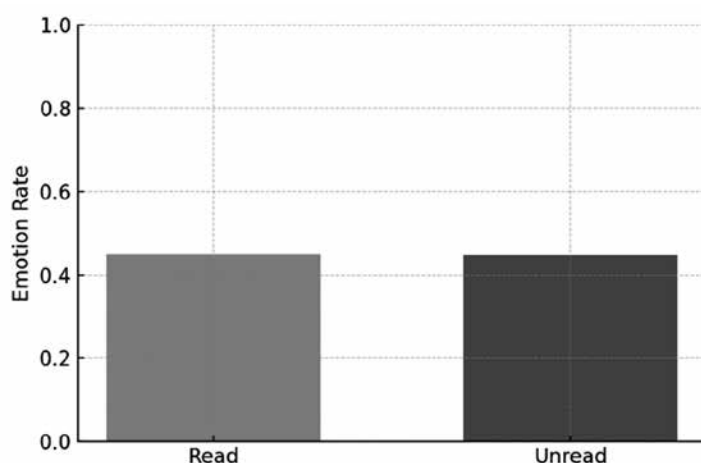


図1 既読・未読の状態とネガティブ感情発現率

注：本図は、既読・未読それぞれの状態で、4種類のネガティブ感情のうちいずれかが生じた割合を示したものである。具体的な数値は表1を参照。

この差は統計的にも有意ではなく、カイ二乗検定では $\chi^2(1) = 0.09$, $p = .77$ と、既読・未読の違いが感情発現率に有意な影響を与えるとは言えなかった。これらの結果は、状態そのものよりも、むしろ「誰とのやりとりか」という対人関係の要因や、そのときの具体的な状況的文脈のほうが、ネガティブ感情の生起により深く関係している可能性を示唆している。

総じて、既読・未読といった単純なデジタル指標は、それ単独で強い感情反応を誘発するというよりも、他の状況要因と結びつくことで意味を持つ、より文脈依存的なサインとして機能していると考えられる。

3.2 相手関係別の感情発現パターンの比較

続いて、相手関係の違いが既読・未読とネガティブ感情の関連にどの程度影響を及ぼすのかを検討

するため、八種類の相手関係（親、子、友人、片思い相手、恋人、配偶者、同僚・部下、上司）ごとに感情発現率を比較した（表2および図2）。全体の結果とは異なり、この相手関係別の比較では、感情反応に明確な違いがみられた点が特徴的である。

表2 相手関係別の既読・未読とネガティブ感情発現率

相手	状態	n	感情発現率
上司 (boss)	既読	2,312	0.453
	未読	2,312	0.439
子 (child)	既読	2,396	0.438
	未読	2,396	0.464
同僚／部下 (colleague)	既読	3,440	0.443
	未読	3,440	0.448
片思いの相手 (crush)	既読	608	0.599
	未読	608	0.579
友人 (friend)	既読	7,708	0.452
	未読	7,708	0.443
親 (parent)	既読	6,488	0.394
	未読	6,488	0.398
恋人 (partner)	既読	1,392	0.636
	未読	1,392	0.625
配偶者 (spouse)	既読	3,932	0.453
	未読	3,932	0.450

注：nは、各相手関係 × 状態（既読／未読）において、ネガティブ感情（4種類）のいずれかに対する「発現に関する回答」が得られた行の総数である。本データは「参加者 × 相手 × 感情」単位で構成されているため、行数は参加者数と一致しない。既読と未読はデザイン上同数に割り当てられている。

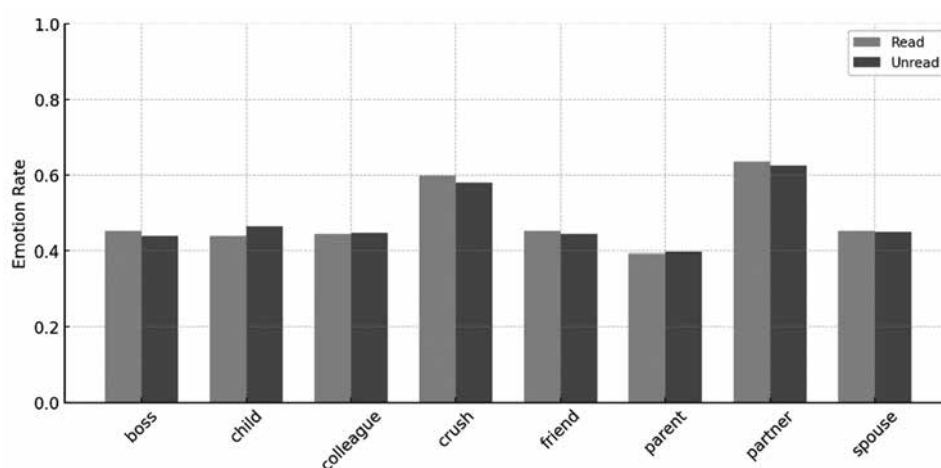


図2 相手関係別の既読・未読とネガティブ感情発現率

注：本図は、8種類の相手関係における既読・未読の状態別のネガティブ感情発現率を示している。発現率はいずれかのネガティブ感情が生じた割合である。具体的な数値は表2を参照。

まず、恋愛文脈に近い相手では特に高い感情発現率が観察された。片思い相手では既読時59.9%、未読時57.9%に達し、恋人では既読時63.6%、未読時62.5%と、本研究で扱った八類型の中でも最も高

い値を示した。恋愛関係にある、あるいはその可能性を秘めた相手は、友人や家族などの一般的な対人関係よりも強い心理的影響を持つことを反映していると考えられる。

これに対し、親、友人、配偶者などの安定した関係では、感情発現率は40%台前半～中盤に留まり、恋愛関係ほどの高い反応は示されなかった。もっとも、子との関係では未読時の発現率（46.4%）が既読時（43.8%）をわずかに上回るなど、状態による微妙な差もみられた。親や配偶者とは異なる、子という相手特有の心理的意味づけが影響している可能性がある。

職場関係である上司および同僚・部下では、既読・未読のいずれも40%台前半に収まり、状態による違いも比較的安定していた。仕事上のやりとりにおいては、既読・未読が感情反応の決定的要因になりにくいと考えられる。

これらの関係ごとの差が統計的に有意かどうかを検討するため、既読・未読と感情発現のクロス表に対して関係類型ごとにカイ二乗検定を行った。その結果、八類型のいずれでも有意差は確認されず（ $p > .10$ ）、唯一子のみ $p = .075$ と弱い傾向差がみられたが、有意と判断できる水準ではなかった。

以上を踏まえると、既読・未読よりもむしろ相手との心理的距離や関係の質が、ネガティブ感情の生起により直接的な影響を及ぼしていることが明確に示された。既読・未読の意味づけは相手によって大きく変化し、その個別性が感情反応に反映されるという、現代のデジタルコミュニケーションにおける重要な特徴が確認されたと言える。

3.3 ロジスティック回帰分析：既読・未読状態の効果を統制した場合の関連性

最後に、状態（既読／未読）がネガティブ感情の発現にどの程度関わるのかを、年齢・性別・相手関係を統制したうえで検討するため、ロジスティック回帰分析を実施した。従属変数はemotion occurrence（0 = なし、1 = 発現あり）とし、説明変数として読み状態、年齢（連続値）、性別（男女）、および相手関係（八類型）を投入した。

まず、モデル全体の適合を確認するため、切片のみのNull modelと、説明変数を含むFull modelの尤度指標（Deviance）およびAICを比較した（表3）。Full modelはNull modelよりもDeviance・AICがともに低く、説明変数の追加によってモデルの適合度が向上していることが確認された。本稿は予測精度を評価する研究ではないため、McFadden R^2 などの擬似決定係数は用いず、より基本的かつ解釈可能な尤度指標を報告する形式を採用した。

続いて、Full modelの推定結果を表4に示す。主たる関心である状態（既読／未読）については、未読のオッズ比はOR = 0.995（ $p = .759$ ）と1に非常に近く、有意差もみられなかった。これは、全体傾向および相手関係別の分析結果と一致しており、状態そのものはネガティブ感情の発現を規定する主要因ではないことを改めて示すものである。

表3 ロジスティック回帰モデルの尤度比較

モ デ ル	Deviance	AIC
Null model (切片のみ)	77,789.41	77,791.41
Full model (既読／未読 + 年齢 + 性別 + 相手関係)	77,079.50	77,101.50

注：Devianceは $-2 \times$ 対数尤度（ $-2LL$ ）であり、値が小さいほどモデル適合が良いことを示す。Full model（説明変数を投入したモデル）は、Null model（切片のみ）よりもDeviance・AICが低く、データにより適合している。

表4 ネガティブ感情発現を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果

変 数	オッズ比 (OR)	95%信頼区間 (CI)	p 値
切片 (Intercept)	1.03	0.95 – 1.11	.461
状態：未読 (vs. 既読)	1.00	0.96 – 1.03	.759
年齢 (連続値)	0.99	0.99 – 1.00	< .001
性別：男性 (vs. 女性)	0.99	0.95 – 1.02	.404
相手：子 (vs. 上司)	1.10	1.01 – 1.20	.022
相手：同僚／部下 (vs. 上司)	1.02	0.95 – 1.10	.634
相手：片思いの相手 (vs. 上司)	1.70	1.50 – 1.94	< .001
相手：友人 (vs. 上司)	1.00	0.94 – 1.07	.904
相手：親 (vs. 上司)	0.79	0.74 – 0.85	< .001
相手：恋人 (vs. 上司)	2.05	1.86 – 2.25	< .001
相手：配偶者 (vs. 上司)	1.08	1.00 – 1.16	.049

注：従属変数は「ネガティブ感情が少しでも生じたかどうか」である。オッズ比 (OR) > 1は感情が生じる確率の上昇、OR < 1は低下を示す。参照カテゴリーは、状態＝既読、性別＝女性、相手関係＝上司 (boss) である。95%CI が1をまたがない場合、統計的に有意な効果と解釈できる。

一方、その他の変数には明確な影響が確認された。年齢はOR = 0.993 ($p < .001$) とわずかに1を下回り、年齢が高くなるほど感情が生じにくくなる傾向が示された。また、相手関係はとりわけ大きな効果を示し、対人文脈の重要性を裏付ける結果となった。参照カテゴリーを上司とした場合、恋愛関係に位置づけられる相手では感情が生じやすく、恋人ではOR = 2.05 ($p < .001$)、片思い相手ではOR = 1.70 ($p < .001$) と、感情発現の確率が大幅に上昇していた。一方で、親ではOR = 0.792 ($p < .001$) と、生起確率が低下する方向に働いていた。

これらの結果は、状態よりも相手との心理的距離・親密性がネガティブ感情の発現にとって中心的な役割を果たしていることを示唆している。全体として、ロジスティック回帰分析は、「未読＝不安」といった一般的イメージが必ずしも統計的に支持されるわけではなく、むしろコミュニケーション相手の性質こそが感情反応を規定する主要因であることを、基礎的ながら明確に示す結果となった。

4. 考察

本研究は、いわゆる negative results study に位置づけられる。

多くのメディア研究やコミュニケーション研究、さらには一般的な言説では、「未読スルーは不安を生む」「既読なのに返信がないと怒りを招く」といった強い効果が想定されがちである (Tsai et al., 2019)。しかし、大規模な実証データを用いて検討した結果、既読・未読の違いだけではネガティブ感情発現に明確な差は確認されず、むしろ対人関係や文脈のほうが強影響をもつことが示唆された。この点は、既読・未読が単純な「感情トリガー」として機能するのではなく、より複雑な認知的・関係的プロセスと結びついている可能性 (Lutz & Büttner, 2026) を改めて示すものである。

4.1 既読・未読の心理的意味づけの多様性

本研究の重要な発見は、既読・未読の状態そのものは、一般に想定されるほど強力な心理的刺激ではなかったという点である。むしろ、既読・未読の解釈は関係性・感情文脈・個人差といった複数の要因を介して構築される“解釈型のサイン (interpretive cue)”であると考えられる。

例えば、恋人や片思い相手のように心理的距離が近い関係では、他の関係よりも感情発現率が高く、この文脈において既読・未読が強い心理的意味を付与されることが示唆された。一方で、職場関係のように役割が形式化された領域では感情発現率は小さく、状態そのものの影響も限定的であった。これらの傾向は、既読・未読の心理的意味が、単独ではなく「相手×文脈」の組み合わせの中で立ち上がることを示唆している。

また、年齢が高いほど感情発現が弱まっていた点は、既読機能が登場したタイミングやモバイルコミュニケーションの文化的変化との関連も考えられる。既読機能が「当たり前」である世代と、「後から追加された便利機能」として受け止めてきた世代では、同じ刺激にも異なる意味が読み取られる可能性がある。

4.2 既読・未読と感情反応の関係の再検討

本研究の結果は、既読・未読という二分法的な状態が、それ自体で強いネガティブ感情を直接生み出すわけではないことを明確に示している。これは、「未読スルーは不安を生む」「既読なのに返信がないと怒りを招く」といった直観的な理解が、人々の実際の体験に内在するコミュニケーション過程の多層性を十分に捉えきれていないことを意味する。

実際の対人コミュニケーションでは、既読・未読の解釈は単純な0 / 1の反応として生じるわけではなく、複数の心理的・関係的・文脈的要因が重層的に関与しながら形成されていると考えるのが自然である。例えば、相手との心理的距離や関係満足度が高い場合には、同じ未読や既読であっても受け手の反応は大きく変動しうる。直前のやりとりの内容やメッセージのトーンが軽い雑談なのか、実用的な依頼なのか、あるいは感情的な内容なのかによっても、既読・未読の意味づけは質的に異なるものとなるだろう。

さらに、個人がもつ特性や感受性も既読・未読の解釈に影響を及ぼす (Blabst & Diefenbach, 2017)。例えば、不安傾向が高い人や対人関係の微細な変化を敏感に読み取る人では、未読・既読の違いがより強い情動反応を引き起こすかもしれない。一方で、オンラインでのやりとりに距離感をもっている人や、返信スピードを気にしないタイプの人では、この影響はきわめて限定的であると考えられる。

こうした個人差に加え、「どの程度返信が期待される関係なのか」という対人規範も見逃すことはできない。恋人や片思い相手の未読・既読は、友人や家族と比較してより強い意味を帯びやすく、職場の上司や同僚の場合には、これが感情的反応を生み出す契機とはなりにくい。既読・未読には、相手ごとの役割期待や関係規範が折り重なる形で心理的な意味づけが付与されているのである。

さらに、世代差という文化的・歴史的な要因も、既読・未読の解釈に大きく影響を及ぼしている可能性がある。LINEや既読機能が「生まれたときから存在する」ものとして育ってきた若年層と、後年になってモバイルコミュニケーションに適応した中年層・高年層とでは、既読や未読の心理的含意は必ずしも同一ではない。若年層にとっての既読・未読は日常的に情報管理を行うためのシグナルかもしれないが、年齢が高いほどこれに強い意味を置かず、むしろ「返信が多少遅れても問題ない」という解釈を取りやすい可能性がある。

これらの点を踏まえると、既読・未読の効果を理解するには、単純に「既読か未読か」という二値の区別に基づく比較のみでは不十分であることは明らかである。既読・未読が心理的にどのような意味を帯びるかは、相手との関係性や個人特性、社会的規範、メッセージの内容、やりとりが置かれた文脈など、複数の要因が複合的に絡み合う過程の中で初めて成立する。既読・未読というデジタルなサインは、それ単体ではなく、コミュニケーションの文脈の連鎖の中で意味を生成する「関係的・文脈的な記号」であると位置づける方が、現代のメッセージング文化を理解する上でより妥当であると言える。

4.3 今後の研究に向けた提言

本研究で得られた基礎的知見を踏まえると、既読・未読という単一の指標のみを用いて感情反応を説明することには限界がある。今後の研究では、こうした限界を乗り越えるために、より複合的かつ多層的なアプローチが求められる。本節では、それに向けた具体的な方向性を示したい。

まず、感情を総合的に扱うのではなく、感情の種類ごとに既読・未読の影響を精緻に検討する必要がある。本研究では、不安・怒り・悲しみ・罪悪感といった多様な感情を一括して分析したが、これらの感情は生起メカニズムが大きく異なる。例えば、怒りは相手の「規範逸脱」に敏感であり、不安は「予測不能性」に強く反応することが知られている。既読・未読がどの感情にどのように作用するのかを、より細分化した分析枠組みで捉える必要があるだろう。

次に、返信速度と既読・未読の組み合わせが生み出す複雑なタイミング構造についても検討の余地が大きい。現実のコミュニケーションでは、「未読だが返信は早い」「既読だが長時間返信がない」「長い未読状態の後に突然既読になる」といった多様なパターンが存在し、これらが異なる感情反応を引き起こす可能性が高い。既読・未読単体で有意差がみられなかったのは、むしろ返信速度との相互作用が極めて重要であることを示唆しているとも言える。

また、相手関係を単に「親・友人・恋人」などのカテゴリーで捉えるだけでは、心理的な側面を十分に説明できない可能性がある。今後は、返信が期待される／期待されない関係、安定している／不安定な関係といった心理的次元に基づく再分類を試みることで、既読・未読の意味づけがより正確に把握できると考えられる (Gangneux, 2021)。こうしたアプローチは、既存の八分類を超えた、より関係の質に焦点をあてた対人コミュニケーション研究の発展に寄与するだろう。

さらに、発達の視点の導入も重要である。本研究では年齢と感情発現の関連が確認されたが、これは単なる年齢効果というより、既読機能をどのような文化的背景で受容してきたかという世代差が反映されている可能性が高い。若年層は既読機能を「生まれたときから存在する」ものとして体験し、既読・未読に対する敏感さが高い傾向がある一方、中年層や高齢層は既読・未読を「後から追加されたコミュニケーション手段」として受容してきたため、既読・未読への意味づけが異なる可能性がある。こうした世代間比較は、今後の研究にとって示唆を与えるだろう。

最後に、既読・未読というサインの意味づけは、受け手が瞬時に行う推測や補完のプロセスと密接に関わっているため、質的研究の必要性も指摘しておきたい (Chou et al., 2022)。インタビューや思考プロトコル法を用いることで、既読や未読を見た瞬間に人々がどのような推測プロセスを経て感情を形成しているのか、その「解釈の生成過程」を明らかにすることができるだろう。これは、定量分析では捉えきれない微細な判断プロセスを理解するうえで不可欠である。

以上のように、既読・未読に対する人々の反応は、単純な二分法ではなく、関係性、感情特性、個人差、社会文化的背景、コミュニケーションの時間構造といった多層的な要因が絡み合う過程の中で生み出される。今後はこうした多面的な要因を統合的に扱う研究によって、既読・未読が現代のデジタルコミュニケーションにおいて果たす役割をより深く理解することが期待される。

4.4 本研究の限界と貢献

本研究は、LINEにおける既読・未読反応について、大規模調査データを用いてその全体像を概観し、基礎的な傾向を整理することを主眼としている。そのため、実験的操作や因果推論を伴う高度なモデル、あるいは実際のやりとりログを用いた詳細な時系列分析などは扱っておらず、得られる知見はあくまで記述的・探索的な範囲にとどまる。また、本研究が用いたデータは想定場面に対する自己報告であり、実際の行動を直接計測したものではないという点も留意すべきである。

こうした制約から、本研究の結論は「既読・未読の因果的影響」を断定するものではなく、LINEの既読・未読が人々の感情反応にどのように“位置づけられているか”を幅広く捉えた、基礎的・資料的な知見である。それでもなお、本研究が明らかにした「既読・未読は単独では強い感情トリガーとならず、むしろ対人関係や文脈の中で意味を獲得する」という傾向は、これまで一般的な言説のな

かで自明視されてきた理解とは異なる重要な示唆を提供している。

また、本研究のように、既読・未読を単純な二値比較として扱うのではなく、関係性・年齢・心理的要因といった複数の軸から全体像を俯瞰する取り組みは、今後の研究を設計する際の基盤として有用である。特に、LINEの既読機能が導入されて10年以上が経過し、世代差や利用規範が大きく変化するなかで、読み状態の心理的意味は固定的ではなく、文化的・発達的に変容する可能性が高い。本研究の知見は、多層的な研究を展開するうえで、出発点として位置づけられる。

本稿は、先行研究が整理しきれてこなかった「既読・未読反応の全体像」を広く俯瞰し、今後の学術的・実践的研究に向けた足場を提供するものである。特に、LINEをはじめとするモバイルメッセージングが社会インフラ化し、既読・未読にまつわる心理過程が日常的なコミュニケーションの一部として組み込まれるなかで、その基礎的理解を示すことには意義があると言える。

4.5 おわりに

本研究は、LINEにおける既読・未読の効果を大規模データに基づいて整理し、既読・未読そのものは一般に想定されてきたほど強力な心理的トリガーではないことを示した。既読・未読による感情発現の差は統計的に明確ではなく、むしろどのような相手との関係にあるのか、どのような状況でメッセージがやりとりされたのかといった文脈的要因が、ユーザーの反応を大きく左右していた。

既読・未読が単なる二値的なサインではなく、関係性・文脈・感情の組み合わせの中で意味が立ち上がる「解釈的シグナル」であるという本研究の知見は、日常のコミュニケーションに対して新たな視点を提供するものである。既読や未読に一喜一憂する現象そのものが、私たちが他者との関係をどのように理解し、どのように気遣い、どのように心を動かしているのかという、対人関係の複雑性と豊かさを映し出しているとも言える。

今後は、返信速度、感情特性、年齢層の違い、さらには関係性の質といった多層的な要因を組み合わせた研究が進むことで、既読・未読の心理作用はより立体的に理解されるだろう。既読・未読を「単独で評価する」段階から、「文脈の中で再定義する」段階へ移ることが、今後の研究に求められている。

謝辞

本研究はJSPS科研費18K02912、24K06337の助成を受けています。

参考文献

- Agarwal, N. K., Mitiku, T., & Lu, W. (2022). Disconnectedness in a connected world: why people ignore messages and calls. *Aslib Journal of Information Management*, 74(4), 650–672.
- Blabst, N., & Diefenbach, S. (2017). WhatsApp and wellbeing: A study on WhatsApp usage, communication quality and stress. In *HCI' 17: Proceedings of the 31st British Computer Society Human Computer Interaction Conference* (Article 85, pp. 1–6). British Computer Society. <https://doi.org/10.14236/ewic/hci2017.85>
- Chou, Y., Lin, Y., Lin, T., You, H., & Chang, Y. (2022). Why did you/I read but not reply? IM users' unresponded-to read-receipt practices and explanations of them. *Proceedings of the 2022 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems*. ACM. <https://doi.org/10.1145/3491102.3517496>
- Gangneux, J. (2021). Tactical agency? Young people's (dis)engagement with WhatsApp and Facebook Messenger. *Convergence: The International Journal of Research into New Media Technologies*, 27(2), 458–471.
- Kato, S., Kato, Y., & Ozawa, Y. (2020). Reply speed as nonverbal cue in text messaging with a read receipt display function: Effects of messaging dependency on times until negative emotions occur while waiting for a reply. *International Journal of Technology and Human Interaction*,

16(1), 36-53.

加藤由樹. (2016). 既読無視と未読無視：LINEの既読表示機能に関する基礎調査. メディア情報研究, 2, 17-32.

加藤由樹, 加藤尚吾, 佐藤弘毅 (2026). LINEにおける返信時間と感情の生起—待つ側 vs 待たせる側の比較分析—. 教育情報研究, 42(1), in press.

Lutz, S., & Büttner, C. M. (2026). "This message was deleted": The psychological consequences of being out of the loop during messenger use. *Media Psychology*, 29(1), 56-80.

Lynden, J., & Rasmussen, T. (2017). Exploring the impact of 'read receipts' in Mobile Instant Messaging. *Journal of Media, Cognition and Communication*, 5(1), 5-34.

総務省. (2025). 令和6年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 報告書. 総務省. https://www.soumu.go.jp/main_content/001017241.pdf

Tsai, H., Hsu, P., Chang, C., Huang, C., Ho, H., & LaRose, R. (2019). High tension lines: Negative social exchange and psychological well-being in the context of instant messaging. *Computers in Human Behavior*, 93, 326-332.